

## 第 2 回全体研究会

テーマ：「清末期における日本人の四川調査活動とその認識」

日 時：2013 年 5 月 17 日（金）18：00～20：00

報告者：王 宗瑜（四川外語学院）

場 所：大学院校舎 8 階 東アジア研究所共同研究室 1

使用言語：日本語

### 概 要：

四川省と日本の関係を研究する王氏から、清朝末期の日本人が当地で行っていた調査活動に関する報告を受けた。王氏はまず、四川省と重慶（直轄市）の区分について整理し、19 世紀末には同一地域と認識されていたとの前提を確認したうえで、日本人の調査範囲を説明した。竹添進一郎、山川早水、米内山庸夫などの記録について触れ、村田省蔵と小林久平の回顧録・調査報告を用いてその認識を考察した。特に、後に日本国際貿易促進協会の初代会長を務めた村田省蔵が重慶への航路開設調査を行った資料に着目し、詳細な考察を加えた。

質疑応答においては、調査時には辛亥革命に向けた政治活動が活発化していたが、その点に触れた記述が「ない」ことに対する質問が提起された。四川省でも活動があったことは事実であり危険性も指摘されていたのだから、国情の変化を察知していたのではないか。或いは当事者が関心を持たなかったのならば、それは何を意味するのか。王氏は、こうした資料の行間を読む必要性を認めつつも、幅広い関連資料の知識をもとに、いわゆる回想録からは政治情勢の変化は浮かび上がりにくいことを説明した。また、中国が不平等条約の下にあることを、一般民衆が認識していたとは考えられないとの見解を示した。日中関係の中で個人に焦点を当てた認識論が分析されることは意義深く、興味深い研究報告であった。